

歌合における『狭衣物語』撮取をめぐる

著者	濱本 倫子
雑誌名	清心語文
号	5
ページ	43-51
発行年	2003-08
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000308/

歌合における『狭衣物語』摂取をめぐって

濱 本 倫 子

きえかへり露ぞみだるる下萩のすゑこす風はとふにつけても

左歌、よそにききこし秋風、といひ、物おもふくれは我が身
ひとつに、といへる心ことよろしくもえんにもおぼえ侍る
を、右の歌、末こす風はとふにつけても、といへる、また宜
しくは侍るべし、これは狭衣と申す物がたりの歌の心なるべ
し、左もおとるべきにも侍らねども、勝の字つけ侍りにし、
愚老が面目にも侍るべし

新古今時代の『狭衣物語』（以下、『狭衣』）摂取の問題を考える上
で、本稿では歌合判詞から物語摂取における『狭衣』摂取の位相を考
えていきたい。

建仁二（一二〇二）年「水無瀬恋十五首歌合」に詠出された俊成卿
女の歌の『狭衣』摂取をめぐっては、当歌合の俊成判と、この歌合か
ら撰歌結番した「若宮撰歌合」の後鳥羽院判とに見解の相違がみられ
る。まずは、この俊成卿女の歌及び、この歌に対する俊成と後鳥羽院
の判詞を示し、本稿の考察の問題点を明らかにしていこうと思う。

○「水無瀬恋十五首歌合」俊成判 建仁二年九月十三日

七十四番 （寄風恋）

左

良経

萩原やよそにききこし秋風の物おもふくれは我が身ひとつに

右勝

俊成卿女

○「若宮撰歌合」 後鳥羽院判 同年九月二十六日

十五番

左勝

後鳥羽院

わくらばにとひこし比におもなれてさぞあらましの庭の松風

右

俊成卿女

消えかへりつゆぞみだるる下萩の末こす風はとふにつけても

右歌は、さ衣に、すゑこす風を人のとへかしといへる歌の心
なり、難用証歌、左無指難、いささかの勝にや侍らん

「水無瀬恋十五首歌合」の俊成判では、傍線部にあるように、右の俊成卿女の歌が「狭衣」を撰取している点を指摘した上で勝としている。一方の「若宮撰歌合」での後鳥羽院は傍線部のように俊成と同様、この歌が「狭衣」を撰取した歌であることに言及した上で、「難用証歌」として、自身の歌と番えられているにもかかわらず、俊成卿女の歌を負とした。

「水無瀬恋十五首歌合」については、有吉保^{〔注1〕}による成立や書誌の問題についての一連の論考があり、さらに藤平泉^{〔注2〕}、田村柳壹^{〔注3〕}に詳細な論考がある。これらで明らかになったところでは、「水無瀬恋十五首歌合」の加判は衆議判的要素があつて、評定の座には主催者後鳥羽院や判者俊成、数人の歌人たち（良経、慈円、有家、定家、雅経）が出席していたようである。俊成判にみえる「愚老が面目にも待るべし」（破線部）は評定の座において「狭衣」撰取をめぐり、あるいは難陳があつたところを、最終的には俊成の判断をつけたことに對しての謙辭ではなかつたろうか。（判詞自体の執筆は後日）俊成が後鳥羽院の見解を無視して強引に自説を主張したとは考えにくいが、「若宮撰歌合」で後鳥羽院が俊成判と相反する加判をしていることには、「水無瀬恋十五首歌合」の評定の場で「狭衣」撰取をめぐつて見解の相違があつたことを窺わせる。

当時の物語撰取の流行、また後鳥羽院自身に物語撰取による詠作が多くあることから、後鳥羽院が物語撰取に否定的な態度であつたとは思われない。後鳥羽院はなぜ俊成卿女歌を負としたのか。これまで

「狭衣をめぐる証歌問題」における俊成と後鳥羽院との態度の違いとしか説明されてこなかったが^{〔注4〕}、後鳥羽院がなぜ俊成卿女歌を難じているのかという問題の焦点を明らかにしていくことで、新古今時代の歌合にみられる物語撰取の様相から「狭衣」撰取の位相を明らかにしたい。

なお、「若宮撰歌合」と同じ結番で加判された「桜宮十五首歌合」（同年九月二十九日）では、同番に對して「左はまつによそへておもひをのへ、右は萩のうはかせみにしみてなをうらみふかくや侍らん。左右ともに難定。よつて持とす」^{〔注5〕}とあり、「狭衣」撰取には触れられていない。「桜宮十五首歌合」は俊成の判とされているが、後鳥羽院の判を俊成が追判するという点には疑問がもたれている^{〔注6〕}。また、先に示した「水無瀬恋十五首歌合」の判詞は流布本系の本文であるが、異本の判詞では「左歌やさしき様なりといへとも、右歌にはいかて可及、尤に殊勝之」^{〔注7〕}とあり、これも「狭衣」撰取に関しては触れられていない。異本の判詞については俊成とは別人物によるものと考えられている^{〔注8〕}。「水無瀬恋十五首歌合」の問題を考える上では「桜宮十五首歌合」や「水無瀬恋十五首歌合」異本の判詞についても重要であるが、本稿では判者の明らかな「水無瀬恋十五首歌合」（流布本）と「若宮撰歌合」の二つの歌合での俊成と後鳥羽院の見解の相違に焦点をあてることで、歌合における「狭衣」撰取の問題を考えることが目的であるので、「桜宮十五首歌合」・「水無瀬恋十五首歌合」の異本の判詞については触れずに考察を進める。

二

まず俊成卿女が本歌とした『狭衣』の歌そのものを問題として後鳥羽院が難じているかを疑ってみる必要があるかと思う。俊成卿女歌の本歌となった『狭衣』の歌は

①折れ返り起き臥しわぶる下萩の末越す風を人の問へかし

(狭衣物語・卷三 狭衣)

である。俊成卿女歌「きえかへり露ぞみだるる下萩のすゑこす風はとふにつけても」は三句目と四句目「下萩のすゑこす風」が本歌と歌詞も位置も同じくしている。これに加えて結句「問へかし」(①本歌)と「とふにつけても」(俊成卿女歌)も似通うが、もし本歌から摂取する詞句の分量が多いことや、位置を変えずに取り入れたことを難じたのであれば、判詞にその旨が記されるのが自然であるので、摂取した詞句の問題ではないようである。

俊成卿女歌の『狭衣』摂取の核となるのは、「末越す風」であるが、この歌詞を用いた歌は次に示すように、良経、定家、後鳥羽院にもみられる。このうち後鳥羽院の歌のみ、本歌を『狭衣』と認定しがたい。

②をきはらやすゑこすかぜのほにいでてしたつゆよりものびかねける

(秋篠月清集・四三〇・治承題百首・草花)

③いくかへりなれてもかなし萩原やすゑこす風の秋のゆふぐれ

(正治初度百首・秋・一三四二 定家)

④きりぎりすうらむるこゑも庭の萩のすゑこす風も秋ふけにけり

(同・秋・五二 後鳥羽院)

この三首は、②の良経の歌が建久六(一一九五)年頃の「治承題百首」、③の定家と④の後鳥羽院の歌が正治二(一二〇〇)年「正治初度百首」での詠作で、俊成卿女歌に先んじるものである。このうち②の良経と③の定家の歌は、次の

⑤身にしみて秋は知りなき萩原や末越す風の音ならねども

(狭衣物語・卷三 女二の宮)

という『狭衣』の女二の宮の歌を本歌とする。この歌は①の歌と同じ場面の歌で、狭衣が贈った歌(①)をみて、女二の宮が詠んだ歌である。一方、④の後鳥羽院の歌は、『狭衣』の①もしくは⑤の歌から「末越す風」を摂取したというより、次の歌を本歌としてあげるほうが適当であろう。

⑥萩の葉のすゑこす風の音よりぞ秋のふけゆく程はしらるる

(女四宮歌合・をぎ・一四 みなもとのすけなか)

この歌の四句目「秋のふけゆく」と④の後鳥羽院の歌の結句「秋ふけにけり」に歌詞の近接がみられる。「女四宮歌合」は当時の歌学書『袖中抄』や『和歌童蒙抄』に引かれるなど有名な歌合であったので、後鳥羽院がこの歌合を知っていたということは十分に考えられよう。「女四宮歌合」は『狭衣』に先行するものであり、⑤の『狭衣』の歌は、歌詞やその情趣からみて、この⑥の「女四宮歌合」の歌の影響の下になったと思われる。後鳥羽院が「末越す風」に着目して作歌したのは、

②の良経や③の定家の『狭衣』撰取歌の影響と考えられるが、後鳥羽院は彼らの典拠とした『狭衣』の歌の、その典拠となった歌から歌詞を引いたことになる。

しかし、この点のみから、後鳥羽院の『狭衣』撰取に対する否定的態度を見出すのは、実際に後鳥羽院が『狭衣』撰取を行っていること^④と照らし合わせれば、早急であろう。ただし、この事例からは後鳥羽院が「末越す風」の『狭衣』歌より古い典拠を知っていた、それが「女四宮歌合」という晴の歌であったということは確認できると思われる。

三

では、次に俊成卿女の歌が詠出されたのが、歌合の場であったという点に問題を移して、歌合における『狭衣』撰取の問題を考えていくことにする。

俊成卿女歌に対する「若宮撰歌合」での後鳥羽院判にある「難用証歌」は、歌合における物語歌を典拠とする歌を詠出することを問題としている。

- ・「大方如此物語などのことはあながちの名事ならずはよむまじなどよみあひて侍るにや」(季経判 千五百番歌合・九六五番)
- ・「ふるき人は、歌合の歌をば本歌にもいだし証歌にももちゐるべからずと申しけれど」(顕昭判 同・千二百七十六番)

・「歌合は物語などの歌にはなるべくも侍らねば」(顕昭判 同・千二百五十二番)

これらはすべて六条家歌人の判詞であるが、歌合に物語歌を典拠とする歌を出詠することを避ける伝統的な考え方が根強かったことが窺える。後鳥羽院が「難用証歌」として俊成卿女歌を難じているのは、このような伝統的な認識を背景にしていることは間違いないが、歌合における物語撰取のすべてを否定しているということでもなさそうである。というのは、後鳥羽院の「水無瀬恋十五首歌合」への詠出歌に次のような物語撰取がみられるからである。

君ももしながめやすらなび衣あきたつ月を空にまがへて

(六五・左勝・羈中恋 後鳥羽院)

この後鳥羽院の歌に対して、俊成は

左は、朝たつ月を空にまがへて、と侍るすがた、源氏物語の花の宴の巻の歌をおもひ出られていみじくえんにみえ侍り

と述べて勝としている^⑤。この歌は「若宮撰歌合」に選出されてい

ないので、後鳥羽院自身の判断は窺い知れないが、俊成の言うように、この歌は、『源氏物語』(以下、『源氏』)、「花宴」の巻の

世に知らぬ心地こそすれ有明の月のゆくへを空にまがへて

(源氏物語・花宴 光源氏)

を踏まえての作歌とみてよいだろう。他にも後鳥羽院の歌では、

うつりゆくまがきの菊もをりをりはなれにしころの秋をこふらし

(三五・左勝・冬恋 後鳥羽院)

が、『源氏』の

色まさるまがきの菊もをりをりに袖うちかけし秋を恋ふらし

(源氏物語・藤裏葉 光源氏)

を本歌としている。

ここから想定されるのは、後鳥羽院は「水無瀬恋十五首歌合」・「若宮撰歌合」の時点では、歌合の歌の典拠として『源氏』は許容されていて、『狭衣』はそうではなかったのではないか、ということである。そこで、次からは『狭衣』が歌合判詞でどのように言及されてきたかをみていくことにする。

新古今時代の物語撰取の問題を考ようとする時、やはり「六百番歌合」における俊成のかの有名な判詞に立ち返ってみようと思う。

判云、左、なににのこさんくさのはらひとへにかはる野辺の気色めれ右方人草の原難申之条、尤うたたある事にや、紫式部歌よみの程よりも物かく筆は殊勝なり、そのうへ花宴の巻はことにえんなる物なり、源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり

これは、本歌合での良経詠、

見しあきをなににのこさむくさのはらひとへにかはる野辺の気色に
(五〇五・左勝・枯野)

が「草の原、聞きよからず」と難じられたの対して反論したものである。良経詠の「草の原」の典拠としては俊成の判詞の文脈上、当然我々は『源氏』の「花宴」巻の歌、

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじと思ふ

(源氏物語・花宴 臘月夜)

を想起する。しかし、すでに指摘されているように(註1)、当の良経詠はこの『源氏』の歌よりも、次の『狭衣』の歌

尋ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露

(狭衣物語・巻二 狭衣)

に拠っているとみるほうが自然である。俊成がこの『狭衣』の歌を知らないはずはない。俊成はあえて『源氏』のほうを示したのである。勿論『狭衣』歌自体が『源氏』歌の影響を受けて成立しているので、典拠としては『源氏』を示すほうが適當であつたと言えるが、俊成がなぜこの判詞で『狭衣』ではなく『源氏』を示したのかについては、渡部泰明(註12)、松村雄二(註13)の指摘があるように、当時の俊成の個人的な事情が影響していると考えることができる。俊成は「六百番歌合」のなる直前の建久四(一一九三)年二月に妻(親忠女)を亡くしている。俊成の家集「長秋草」に残る妻への哀傷歌の数々は、よく知られるように『源氏』の歌が踏まえられている(註14)。このような俊成の『源氏』撰取は生前、物語を愛し源氏供養を行ったとみられるこの妻を哀悼するに相応しい表現方法でもあつたのだらう。その哀傷歌群のうちの二首、

おもひかねくさのはらとてわけきてもころをくだくこけのした
かな
(長秋草・一七八)

くさのはらわくるなみだはくくれどこけのしたにはこたえざり
けり
(同・一七九)

には「草の原」がみえ、当時の俊成にとって「草の原」が亡き妻への思いと深く結びついた詞であったことが窺える。「六百番歌合」での俊成の判詞が、彼のこのような「草の原」への思い入れを反映したものであったとみれば、あのやや興奮したような物言いが理解されるのである。

ただ、この判詞での「草の原」に対する俊成のこだわりが彼の亡き妻への思いを反映したものであったとしても、俊成が『狭衣』でなく、『源氏』を取りあげたという点については尚疑問が残る。良経詠は勿論、『長秋草』の二首とても必ずしも『源氏』の歌のほうに拠っているとは言い切れず、『狭衣』歌を典拠として考えても差し支えない。要するに、俊成にとっては『源氏』か『狭衣』か、が問題なのではなく、物語世界に根ざす「草の原」という詞に亡き妻への哀悼の念を託することに意味があるのであろう。「六百番歌合」の判詞では、良経詠が『狭衣』により近接しているにもかかわらず、『源氏』を示したというのは、やはり『源氏』でなくてはならなかったという俊成の考えがあったのではないだろうか。

そこで考えられるもう一つの要因は、これが「六百番歌合」という公の場での発言であるということである。先に述べたように歌合に物語歌を典拠とする歌を出詠することを避ける伝統があった中で、物語を歌合の歌の証として提示するのである。「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」は「源氏」に喩の場、歌合の歌の典拠（証歌）としての資格を与えたに値する。それにはやはり、同じ物語でも『狭衣』より

『源氏』のほうに説得力があると考えたのではないだろうか。『狭衣』は当時愛読された物語ではあったけれども、数ある物語の中では何をおいても『源氏』であったことは言うまでもなく、それは『無名草子』の叙述をみても明らかである。実際「六百番歌合」には定家や良経に『狭衣』を撰取した歌が存在するが、俊成は判詞において『狭衣』に言及していない（注15）。

四

では、歌合判詞に『狭衣』が登場してくるのはいつのことなのだろうか。「水無瀬恋十五首歌合」・「若宮撰歌合」に先んじるものとしては、建久九（一九八）年「後京極御自歌合」に『狭衣』に触れた俊成の判詞がみられる。「六百番歌合」からは約五年経過している。

今はとて涙の海にちちをたえおきぞ煩ふ今朝の舟人

（後京極御自歌合・一二一・治承題百首・後朝恋
本歌は『狭衣』の次の

楫緒絶え命も絶ゆとしらせばや涙の海に沈む舟人

（狭衣物語・巻一 飛鳥井女君）

である。良経の歌に対して、俊成は

左の涙の海、狭衣と申す物語なんと思出でられてことにいうにお

ほえ侍り、まさると可申哉

と、『狭衣』撰取を明らかにした上で勝としている。ただ、この例は歌

合といっても自歌合であって公に披露されたものでない。そのため、この例をもって『狭衣』を歌合の証として認めた先例とは言えないであらう。

次にみえるのは、「千五百番歌合」においてである。例を示す。

右歌は、源氏の物語には、うきみよにやがてきえなばたづねてもくさのはらをばとはじとやおもふ、狭衣物語には、たづねべきくさのはらさへしもがれてたれにとはましみちしばのつゆ、ふるき人は、歌合の歌をば本歌にもいだし証歌にもちるるべからずと申しけれど、源氏、世継、伊勢物語、大和物語とて歌読の見るべき歌とうけたまはれば、狭衣も同じ事歟、

これは、通具の「草のはらとへどしらたまとればけぬはかなの人のつゆのかごとや」（千二百七十六番・右）に対する顕昭の判詞である。この顕昭の判詞は、先の「六百番歌合」の俊成の判詞を強く意識しており、「六百番歌合」から「千五百番歌合」に至り、六条家の顕昭も物語撰取を認める発言をするまでに、物語撰取をめぐる歌壇の実態は進展している。そして、この顕昭判で注意されるのは、物語の示し方で、「源氏、世継、伊勢物語、大和物語とて歌読のみるべき歌とうけたまはれば」^{注16}と述べてから「狭衣も同じ事歟」（破線部）というふうに、「狭衣」は追認するかたちで示されている。つまり、顕昭の基準としては、『源氏』が「六百番歌合」の俊成判により、歌合の証歌として認められる方向にあっても、『狭衣』に関しては一考を要するものなのであろう。このあたりは『源氏』が認められるからといって、それが『狭

衣』にも適用されるものではないという物語に対する認識が垣間見られて興味深い。

「千五百番歌合」は歌人の詠進は建仁二（一二〇二）年六月で、同年九月の「水無瀬恋十五首歌合」に先んじるが、これを歌合に番え加判するよう院宣が下つたのは九月であつて、「水無瀬恋十五首歌合」・「若宮撰歌合」の成立時点では、「千五百番歌合」の判詞は執筆段階であつたと考えられる。つまり、後鳥羽院が俊成卿女の「狭衣」撰取歌に対して「難用証歌」と難じた時点では現存に限つてではあるが、公の場で「狭衣」を歌合の証として認めた判詞はなかったということになる。このことが、後鳥羽院が俊成卿女歌に「難用証歌」と難じた最たる要因の一つではないかと思うのである。

この二年後、元久元（一二〇四）年十月の「石清水若宮歌合」で、後鳥羽院は、「あき風ををれふしわびしした萩のおきまよふ霜にむすばれつづ」（二六・長房）という歌に對して

右歌こす風を人のとへかしといへる物がたりの心か、やさしきさまなれども、かつべきにはあらず

という判詞を残している。判詞中の「物がたり」は「狭衣」のこととで、指摘される「こす風を人のとへかし」の歌は本稿で問題としてきた「水無瀬恋十五首歌合」の俊成卿女歌の本歌である「狭衣」の歌（二）で示した①の歌のことである。歌は負とされているが、この時点ですでに、『狭衣』の歌は証歌として問題視されるということではなく、「やさしきさま」というように、肯定的に捉えられるようになって

ている。

五

以上のように、「水無瀬恋十五首歌合」と「若宮撰歌合」の俊成卿女の『狭衣』摂取歌をめぐる俊成と後鳥羽院の見解の相違を軸に、新古今時代の歌合における『狭衣』摂取の扱われ方をみてきた。歌合においてみられる物語摂取の様相は、物語摂取を推進めようとする革新と伝統的な考え方を守ろうとする保守との闘き合いでもあった。物語摂取の中でも、『狭衣』摂取は『源氏』よりさらに新しいという認識がもたれていたであろうことが窺えた。

このように歌合において『狭衣』が認められていくという背景には、歌人たちの盛んな『狭衣』摂取があつたと考えてよい。また建久中期頃の成立ともいわれる^{〔注17〕}定家の『百首歌合』は、『源氏』の歌に同数の『狭衣』の歌を番わせており、当時の歌人の『狭衣』への関心の高さが窺える。新古今歌人の『狭衣』摂取の実態については、後藤康文の『狭衣』受容史研究の立場からの論考があり^{〔注18〕}、この論では「特に、定家、良経、俊成卿女ら御子左家流歌人の作に多い」との調査結果が示されている。このような傾向は『源氏』摂取の場合にもみられるもののだが、「六百首歌合」の俊成判以降、広く普及する物語摂取の典拠の主流は『源氏』であつて、『狭衣』にまで典拠を求めるというのには、歌人のそれ相応の物語に対する造詣の深さを反映していると

考えてよいだろう。その意味ではやはり、御子左家及びその周辺歌人に集中するという傾向は、『源氏』摂取の場合よりも、『狭衣』摂取においてより如実に表れてくると言える。しかし、新古今和歌研究の側からはさらに、一様ではない各歌人の『狭衣』摂取のあり方を見出ししていく必要があり、それは可能である。新古今歌人、特に筆者の関心の中心である俊成卿女の『狭衣』摂取については稿を改めて論じたい^{〔注19〕}。

* 歌の引用については、『源氏』の歌は小学館『日本文学全集』、『狭衣』は岩波『日本文学大系』、その他の歌及び歌合判詞は断らない限り『新編国歌大観』の表記による。

注1 有吉保『新古今和歌集の研究 基盤と構成』第三章（昭和四十年・三省堂）

2 藤平泉「水無瀬恋十五首歌合考―歌合の場と改作の例―」（『神戸女子大学紀要』二十五・平成四年）

3 田村柳壺「新古今時代の歌合―「水無瀬恋十五首歌合」をめぐる諸問題―」（『和歌文学論集』『屏風歌と歌合』所収・平成七年・風間書房）

4 注1に同じ

5 引用は群書類従本による。書陵部本（『新編国歌大観』の底本）では、この後に「右は、さころもにすゑこすかせをといへる歌の心也、難用証歌、左はさしたる難なし、いさ、かに勝にや侍らむ」

が付加されている。

6 注1に同じ

7 引用は有吉保編「水無瀬恋十五首歌合 編者蔵」(笠間影印叢刊・昭和四十八年)による。

8 注2・注3に同じ

9 後藤康文「後鳥羽院の『狭衣』受容」(『語文研究』六十九・平成二年)に詳しい。

10 異本判詞は「左哥末様いとめづらかによりしく侍也」

11 岩波日本古典文学大系『歌合集』谷山茂の補注

12 渡部泰明「源氏物語と中世和歌」(『国文学解釈と鑑賞』別冊平成十年六月・至文堂)

13 松村雄二「源氏物語と源氏取り―俊成「源氏見ざる歌よみは遺恨の事」前後―」(『源氏物語研究集成』十四卷所収・平成十二年・風間書房)

14 寺本直彦「源氏物語受容史論考 正編」(昭和四十五年・風間書房)

15 例えは定家の「なびかじなあまのもしほびたきそめてけぶりは空にくゆりわぶとも」(六百番歌合・六〇七・初恋／新古今・恋二・一〇八二)は『狭衣』の「おほろけに消つとも消えむ思ひかは煙の下にくゆりわぶとも」(巻三)を、また、良経の「うちとけてたれにころもをかさぬらんまろがまるねも夜ぶかきものを」(一一二・寄衣恋)は『狭衣』の「とけて寝ぬまろがまる寝の草枕

ひと夜ばかりも露けきもを」(巻四)を踏まえていると考えられる。

16 「源氏、世継、伊勢物語、大和物語とて歌読の見るべき歌とうけたまはれば」とあるうちの「世継」(『大鏡』)については、「六百番歌合」の判詞に「雲林院にて世継翁が物語にも、選子内親王はめ申したる所にも、いつきの宮おほく物し給へどもとこそ申しためれ」という例がある。

17 樋口芳麻呂「松浦宮物語」『物語二百番歌合』の成立時期について(『国語と国文学』昭和五十五年五月)

18 後藤康文「『狭衣物語』作中歌と中世和歌」(『文献探究』十六・昭和六十年)

19 拙稿「俊成卿女の『狭衣物語』摂取について―後鳥羽院歌壇期の詠作を中心に―」(『和歌文学研究』八十六・平成十五年)で論じた。

〔付記〕本稿は、平成十一年六月十四日、本学日本語日本文学会における口頭発表をもとにまとめたものです。ご教示いただきました先生、院生の方々に御礼申しあげます。